

平成25年度 第1回長野県観光振興審議会 議事録

1 日時：平成25年9月12日（木）午前10時40分から午後0時40分

2 場所：長野県庁 特別会議室

3 出席者

[委員] 岡庭一雄、加藤史子、木村 宏、駒谷嘉宏、清水慎一、新宅弘恵、鈴木ともこ、高野和也、竹村元尋、仲野敦子、波瀲郁代、牧野光朗、松本 猛、御代田千春、横山タカ子（敬称略）

[長野県] 観光企画課長 浅井秋彦、観光振興課長 秋山優一、移住・交流課長 小田切昇、国際観光推進室長 佐藤公俊、信州ブランド推進室企画幹 尾島信久、国際課企画幹 塩川吉郎

4 議事録

（浅井観光企画課長）

皆さん、おはようございます。

定刻になりましたので、ただいまから平成25年度第1回長野県観光振興審議会を始めさせていただきます。

私は、当審議会の事務局を仰せつかっております、県の観光企画課長の浅井秋彦と申します。会長が決定するまでの間、進行を務めさせていただきますので、よろしく願いいたします。

本日の会議時間は約2時間で、終了時間はおおむね12時40分頃を予定しております。昼食時間に入ってしまうかもしれませんが、よろしくお願いしたいと思います。

本審議会の委員の委嘱について、ご報告をさせていただきます。本審議会の委員はお手元に申し上げてございます委員名簿のとおり、15名の方をお願いをしております。7月1日付でご委嘱を申し上げたところでございます。本日は全員の委員にご出席をいただいております。ありがとうございます。

それでは最初に、長野県副知事 加藤さゆりよりごあいさつ申し上げます。

（加藤副知事）

皆様、おはようございます。副知事の加藤と申します。

今日は第1回目の観光振興審議会にご出席をいただきまして、ありがとうございます。また、皆様方におかれましては、大変ご多用の中、審議会委員へのご就任についてご快諾をいただきまして、本当にありがとうございます。

ご出席の皆様方におかれましては、日ごろから、観光行政に対しましてご理解と多大なるお力添えをいただいておりますことに、この場をお借りいたしまして厚く御礼を申し上げたいと思います。

今日は、この3月に策定をいたしました「観光振興基本計画」についてご説明さ

せていただき、今後の長野県観光の振興について、皆様方から忌憚のないご意見を
ちょうだいしたいと考えているところでございます。

47都道府県それぞれがすばらしい観光資源をお持ちなわけですが、そういう中で
長野県を選んでいただく、お客様にお選びいただくにあたり長野県の観光資源のど
んなところにもっと磨きをかけていかなければいけないのか、それは、お料理も含
めて、おもてなしも含めて、ただし、それは決して華美なもの、よそさまをまねる
ということではなくて、信州らしさ、あるいは信州の素材を活用したお料理とい
うところで、まだまだ私ども挑戦をできる、あるいは、しなければならないことがた
くさんあるのだらうと思います。

そういう意味でも、それぞれの委員の皆様方のご知見をちょうだいして、長野県
観光、お客様にお選びをいただける観光県、観光立県にさせていただきたいと考
えております。

本日は、率直で忌憚のないご意見を拝聴したいと思っておりますので、どうぞよ
ろしくお願い申し上げます。

(浅井観光企画課長)

それでは、委員の皆様をご紹介させていただきます。お手元の委員名簿の順番に
したがってお名前を申し上げますので、委員の皆様にはご起立をいただければと存じ
ます。

長野県町村会産業経済部会に所属されております、阿智村長の岡庭一雄委員です。

じゃらんリサーチセンター、主席研究員の加藤史子委員です。

信州いいやま観光局、事務局次長の木村宏委員です。

長野県索道事業者協議会会長で、株式会社五竜代表取締役の駒谷嘉宏委員です。

立教大学兼任講師の清水慎一委員です。

軽井沢観光協会の新宅弘恵委員です。

漫画家でエッセイストの鈴木ともこ委員です。

長野県旅館ホテル組合専務理事で、株式会社亀屋本店代表取締役の高野和也委
員です。

東日本旅客鉄道株式会社長野支社、営業部長の竹村元尋委員です。

元外国籍クルーズ客船乗務員の仲野敦子委員です。

株式会社JTB総合研究所、企画調査部長の波瀲郁代委員です。

長野県市長会経済部会長で、飯田市長の牧野光朗委員です。

ちひろ美術館、常任顧問の松本猛委員です。

株式会社KPMG FAS、シニア アソシエイトの御代田千春委員です。

料理研究家の横山タカ子委員です。

ありがとうございました。

申しわけございませんが、加藤副知事は、所用のため、ここで退席をさせていた
だきます。

続きまして、長野県側の出席者、紹介を申し上げます。

観光部長の野池明登でございますが、本日は、所用により急遽出張ということでございまして、欠席をさせていただいております。申しわけございません。

観光振興課長の秋山優一でございます。

移住・交流課長の小田切昇でございます。

国際課企画幹の塩川吉郎でございます。

信州ブランド推進室企画幹の尾島信久でございます。

国際観光推進室長の佐藤公俊でございます。

本日は、このほか観光部及び県庁の関係課の職員が出席させていただいております。よろしく願いいたします。

続きまして会長の選任をお願いしたいと存じます。

本審議会の会長につきましては、お手元の資料、長野県観光振興審議会条例の第5条第1項の規定によりまして、委員の互選により選任することとされております。会長の選任につきまして、ご意見等がございましたらご発言をお願いしたいと存じます。

高野委員さん、お願いします。

(高野委員)

私の方からご提案がございまして。

今回、我々のメンバーとして立教大学の清水先生がお仲間に入っていたわけでございます。

清水先生は、これまでJRさんですとか、JTBさんで役員をお務めになった経験がございまして。また、国の政策にも非常に通じていらっしゃるし、現在は、県の「信州・観光地域づくりマネジメント塾」の塾長も務められており、人材育成の方でも心を砕かれておられますので、もしよろしければ、会長をお願いできればと思います。いかがでございでしょうか。

(浅井観光企画課長)

ありがとうございました。

ただいま高野委員より、清水委員を会長にお願いしたらどうかというご発言がございました。

委員の皆様、いかがでございでしょうか。

【拍 手】

ありがとうございました。それでは、清水委員に会長をお願いすることと決定いたしました。

清水委員には、会長席の方にご移動をお願いいたします。

【清水委員が会長に着任】

(浅井観光企画課長)

それでは、清水会長より一言ごあいさつをいただきたいと思います。
よろしく願いいたします。

(清水会長)

ただ今会長に選任されました清水でございます。どうぞよろしく願いしたいと思
います。

一言だけごあいさつ申し上げます。

私は小諸の出身でございまして、若いうちに東京に出まして、J R 東日本、J T B の役員を 14 年間ばかりしてございまして、その後立教大学の教授をやっております。

国内のあちこちの地域、外国の地域と触れ合う中で、信州の良さをもうちょっと磨かなければいけない、あるいは、もう少しうまい形で発信しなければいけないとかねがね思っております。

私も 65 歳になりますので、そんなことも含めて故郷のお手伝いをするということで、現在は阿部知事にアドバイスもしながら、あちこちの地域のお手伝いをさせていただいております。

今回はこういう形でこの審議会の会長を引き受けることになりましたので、今後ともどうぞよろしく願い申し上げたいと思
います。

(浅井観光企画課長)

ありがとうございました。

引き続きまして、会長代理の選任をお願いしたいと思
います。会長代理につきま
しては、審議会条例第 5 条第 3 項の規定によりまして、あらかじめ会長が指名することになっております。

それでは、清水会長よりご指名をお願いしたいと存じます。

(清水会長)

それでは、本審議会の委員を 3 期にわたってお努めになっておられまして、長野県観光の大きな強みでありますスノーリゾートの振興に精力的に取り組んでおられる駒谷委員をお願いしたいと思
います。

(浅井観光企画課長)

清水会長より駒谷委員を会長代理をお願いしたいとのご指名でございます。
駒谷委員、お引き受けいただけますでしょうか。

(駒谷委員)

その能力のあるやなしやはわかりませんが、一生懸命やりたいと思いますので、お受けいたします。

(浅井観光企画課長)

ありがとうございました。それでは駒谷委員に会長代理をお願いしたいと存じます。

これ以降の議事につきましては、審議会条例第5条第2項の規定によりまして、清水会長をお願いしたいと存じます。よろしくお願いいたします。

(清水会長)

それでは、さっそく第1回の審議を進めていきたいと思います。限られた時間でございますので、効率的に進めたいと思います。

後で意見交換の時間を設けますが、今回は新しい体制での初めての審議となりますので、委員全員にご発言をお願いしようと思っております。よろしくお願い申し上げます。

まず、本審議会の会議の公開と、傍聴等の取扱いについて委員の皆さんにお諮りしたいと思います。

事前に連絡させていただきましたとおり、会議は公開により行いたいと思います。そして、傍聴の取扱いと議事録等の県ホームページ等への掲載につきましては、お手元の資料「長野県観光振興審議会傍聴要領」のとおりとさせていただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

【異議なし】

(清水会長)

それでは、こうした形にさせていただきたいと思います。

つづいて審議に入ります。

これから、「長野県観光振興基本計画[2013～2017]」「平成25年度観光振興施策」についてご審議いただきたいと思います。

委員の皆様には、今申し上げたとおり、事務局の説明を受けまして、ご意見や平成26年度の取組に向けた提言などをいただければありがたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

まず、事務局から資料の説明をお願いします。

(浅井観光企画課長)

それでは、資料の説明をさせていただきます。

はじめに「長野県観光振興基本計画[2013～2017]」の概要について説明させていただきます。

この計画は、昨年 12 月にこの審議会に取りまとめたいただいた答申を踏まえまして、その後県民の皆様からご意見をいただきながら今年 3 月に策定したものでございます。この計画に基づきまして、既に今年度から新しい施策に取り組んでいるところでございます。

お手元に御配りした資料 1-1 「概要版」によりポイントを絞ってご説明させていただきます。

表紙をおめくりいただいた 2 ページは「長野県観光のめざす姿」でございます。めざす姿として『「信州暮らし」が“憧れ”と“感動”を生む観光立県』を掲げてございます。長野県観光の厳しい現状、観光を取り巻く環境や課題を踏まえまして、また、観光振興審議会における議論を総括いたしまして、このような姿を掲げたところでございます。

また、めざす姿の実現に向け各レベルでのあり方をお示するというところで、1 番目、県民の皆さんは、一人ひとりが「信州暮らし」を楽しんで、自信をもって発信しましょうということ掲げてございます。2 番目、地域では、地域全体で魅力を高める「観光地域づくり」に取り組むことを提案したところでございます。3 番目、県全体としては、信州のブランド力を高め、国内外から選ばれる長野県となることを提案したところでございます。

このような姿の実現に向けて、県、市町村、観光関連団体、事業者、県民等が一体となって取り組むことにより、交流人口を拡大すること、観光客だけではなく来訪者の滞在時間を増加させて、消費に結びつく取組をしましょう、その結果として、現在観光地利用者数や観光消費額は減少トレンドにあるわけですが、これを増加に反転させようということでございます。結果的に、地域の実体経済に貢献していこう、こうしためざす姿を掲げたところでございます。

3 ページには 4 つの主要な達成目標を掲げてございます。「観光地利用者数」は、現状 8,435 万人を平成 29 年には 9 千万人にする目標でございます。また、「観光消費額」は現状 3,063 億円を同じく 3 千 3 百億円にするなど 4 つの目標を掲げてございます。

いずれも右肩下がりの現状からしますと、難しい部分がありますが、事業者、県民、観光関連団体、それから行政が意識を共有し、一体となって取り組んで、これらの目標を達成しなければならないと思っているところでございます。

その下では、この計画のキーワードとして 4 つ紹介させていただいております。

1 つ目の「信州暮らし」は、「長野県観光のめざす姿」に使っているキーワードでございます。これは、地域の豊かな自然や美しい景観、地域が受け継いできた食文化や伝統文化、そういった身近にある「信州らしさ」を大切にしながら私たちがつくってきた「ライフスタイル」、これを売っていこうということでキーワードとして掲げてございます。こうしたライフスタイルを楽しもうとする新たな観光需要がございますので、そうした需要に対応すること提案したところでございます。

2 つ目のキーワードは、「観光地域づくり」でございます。これまで観光地とい

うポイントで魅力づくり、発信をしていたわけですが、「観光地域づくり」という面としての魅力づくり、発信をしようとするものでございます。そのためには観光事業者だけの従来の取組ではなく、他の産業の方々、一般の県民の方も含めまして、地域の幅広い層・分野の方にもご参加をいただいて、地域の魅力づくりをしようとするものでございます。

3つ目のキーワードは、「信州ブランドによる発信」でございます。ここでは「信州」のブランドイメージを確立するため、県民みんなで「信州らしさ」や「信州の魅力」を県内外へ統一的に発信するという、それから、信州の価値に磨きをかけることを呼びかけているものでございます。合わせて、県内外に発信するキャッチフレーズ「しあわせ信州」とロゴマーク「信州ハート」を紹介させていただいております。

4つ目のキーワードは、「おもてなし」でございます。「おもてなし」は、旅館やタクシーの従業員の方がお客様をお迎えする場合ばかりでなく、来訪者の立場に立った優しい気持ちがあれば、誰にでも実践できる行動でございます。ここではその具体的な例を紹介させていただいております。

4ページをお願いいたします。この計画の中で重点的に取り組むプロジェクトということで、3つ掲げてございます。

1つ目は、「山岳高原などの強みを活かした滞在型観光地の形成」でございます。長野県だけにしかない魅力によって県外観光地との違いを際立たせていこう、そして本県を旅行先として選んでいただくための観光地づくりに取り組んでいこうというプロジェクトでございます。

2つ目は、「県民参加による共創と協働の観光地域づくり」でございます。その地域ならではの「信州暮らし」の魅力を活かし、多様な主体の参加をいただきながら取り組んでいこうというプロジェクトでございます。

3つ目は、「食や物産、サービスの価値の向上とブランドとしての発信」でございます。来訪者の期待にしっかり応えながら、繰り返し訪れていただくために取り組んでいこうというプロジェクトでございます。

5ページには、この3つのプロジェクトについて、それぞれ「目標」「主な取組」「県民の皆さんに期待したいこと」をご紹介しているところでございます。詳しい内容については資料1-2の計画書に記載してございますが、ここではその概要をお示ししてございます。

6ページは、「県の観光振興施策」でございます。5年間の計画期間中に県が着実に取り組んでまいります観光振興施策を、1から5の分野に整理したものでございます。本年度の具体的な事業については、後ほど資料2の方で説明させていただきたいと思っております。

7ページは、「エリア別の観光地域ビジョン」でございます。10の広域圏ごとにそれぞれの地域特性を踏まえた「めざす将来像」を明らかにしながら、具体的な施策を展開することとしておりまして、エリアごとに個性豊かな観光地づくりを進めていくものでございます。

最後のページは、「みんなで行く合言葉」でございます。ここでは、県民の

皆様の行動目標を「もう1か所」「もう1泊」「もう1コイン」「もう1度」というわかりやすい合言葉として掲げたところでございます。

この合言葉により、県民の皆さんと一体となって観光振興に取り組みながら、地域経済に貢献していかなければならないと考えているところでございます。

計画の概要は以上でございますが、「長野県観光のめざす姿」の実現のためには、これまでのようなキャンペーンを主体とした施策に加えまして、「観光地や観光産業の本質的な部分」の充実・強化という視点での施策にもっと強力に取り組んでいかなければいけないと意識しているところでございます。

特に「観光と他分野の連携」につきましては、例えば観光×農業、観光×文化、観光×スポーツ、観光×健康など、観光と他分野とが連携した魅力の発信により、チャンスを広げていかなければならないと考えているところでございます。このため、今回の審議会の改選にあたりまして、そういった観点で幅広い分野の皆様にご参加をいただいたところでございます。

計画に掲げましためざす姿の実現、目標の達成のためには、県組織が連携して全力で取り組むことはもちろんでございますが、県民の皆さんの協力が不可欠でございますので、現在計画の普及に取り組んでいるところでございます。

つづいて資料1-3、「観光立県長野」再興計画の取り組み実績」をお願いいたします。昨年度までの旧観光計画の取組結果ということで、実績の報告をさせていただくものでございます。

1ページの上の表では、4つの基本的な達成目標の状況を掲げてございます。残念ながら、目標に対していずれも「未達成」という状況でございます。

未達成の要因につきましては、同じページの下「2 取組結果と今後の方向性」というところにまとめさせていただいております。経済状況などの外部要因に加えまして長野県全体の取組についての反省すべき内部要因について整理をさせていただいたところでございます。これらにつきましては、昨年度の審議会にその時点での取組状況をご報告してご議論いただき、新しい観光計画づくりの審議に活かさせていただいたところでございます。

また、旧観光計画では施策体系別に36の達成目標を掲げてございまして、2ページ以降ではそれらの達成状況についてまとめさせていただいております。2ページの表では、36項目中「達成」または「概ね達成」が約7割という状況でございます。個々の状況につきましては、時間の都合もございまして、後ほどご覧いただければと存じます。

続きまして、資料2をお願いいたします。ただ今説明させていただいた新しい観光計画を踏まえまして、平成25年度に県観光部がどのような事業をしているかということで、観光計画の5つの施策分野毎に掲げた主要事業についてご説明させていただきます。

1ページ、「観光地域づくり促進事業」をお願いいたします。長野県の観光地域づくりをけん引する人材を育成するということで、昨年6月、清水会長に塾長をお

願いいたしまして「信州・観光地域づくりマネジメント塾」を開講しております。本年度は引き続き2年目ということで、23人の方の参加を得て開催しているところでございます。

2ページの(3)をお願いいたします。この塾の受講生を中心とした観光地域づくりの具体的な取組に対して財政的に支援する事業でございます。

(4)は県内の観光地域づくりの具体的な実践例、実際に滞在交流型プログラムの造成をしている団体に対して財政的な支援をする事業でございます。本年度の対象地域は「信越自然郷」ということで北信地域に対してこの補助金を交付しているところでございます。

3ページ、「信州おもてなし向上プロジェクト」でございます。来訪者の満足度向上、リピーターの獲得に繋げるため、幅広い県民の皆様や企業・団体に参加をお願いしましてプロジェクトを展開していくものでございます。

具体的には、例えば3(1)では「県民向けの啓発プロモーション」をやっています、(4)では「おもてなしのプロを育てる」ということで研修会を開催したり、次ページの(5)では「効果検証」ということで観光旅行者の満足度調査を実施していきたいと考えております。

また、4の「推進体制」については、信州キャンペーン実行委員会に設けられた「おもてなし向上部会」、有識者により構成される「おもてなし向上懇話会」と連携いたしまして、おもてなしの向上に取り組んでいきたいと考えております。

5ページ、「信州ワインバレー構想」でございます。最近評価が非常に高まっております長野県産ワインのブランド化を推進する施策に取り組むため、今年3月にこの構想を策定いたしました。その中で県産ワインに関する総合的な情報発信、ワインツーリズムを推進するための旅行会社の招へいなどによりまして、「世界が恋する、NAGANO WINE」の実現に向けて効果的なプロモーションを実施していくこととしております。また、6月には「信州ワインバレー構想推進協議会」を設立し、関係者の皆さんと一丸となってブランド化を図りまして、県内ワイン産業のさらなる発展、ワインを活かした地域づくりに繋げてまいります。

7ページ、「信州ブランド戦略」でございます。「信州ブランド」が新しい観光計画にとって重要なキーワードであることは先ほどお話しさせていただきました。ブランド戦略と連携して観光地のブランド化を進めていきたいと考えております。

信州の魅力を強かにPRしていくためには、統一感のあるブランドイメージの発信、それからそれを裏付ける個々の商品や物産、サービスの質の向上が不可欠でございます。

このため、今年3月、これからの取組の方向性を示したブランド戦略のコンセプト編を策定してございます。県民の関心を高めながら、様々な主体が連携して活動を推進していくということでございます。

本年度は、ブランド戦略への理解を広げるとともに、キャッチフレーズ「しあわせ信州」、ロゴマーク「信州ハート」を多くの皆様のご協力を得て普及していきたいと考えております。また、戦略の「行動計画編」を策定する予定としております。

9 ページ、「山岳高原を活かした世界水準の滞在型観光地づくり研究会」でございます。長野県の売りであり他県との差別化ができる山岳や美しい自然、景観などを活かした信州らしい滞在型の観光地をつくろうということで、今年は世界水準のリゾートを参考にしながら、有識者の皆さんにご参加いただきまして、どんなことをめざすのか、またどんな取組をしていったらいいのかということの研究しております。

先月開催した第2回研究会では、10 ページの下に表がございしますが、「木曾町」「大町市、白馬村、小谷村」、飯山市を中心とした「信越9市町村広域観光連携会議」の3地域が「重点支援地域」として推薦されたところでございます。今後は、研究会の中で、これらの候補地を世界水準の観光地とするための戦略を取りまとめたいと考えているところでございます。

11 ページ、「新幹線延伸効果の最大化」でございます。平成27年3月には北陸新幹線が金沢まで延伸するという大きな環境変化がございます。この延伸効果を最大限に取り込もうと、県、関係市町村、関係機関をあげて現在取り組んでいるところでございます。

13 ページをお願いします。この6月に「観光に活かす6つのプロジェクト」を明らかにしたところでございます。①として停車駅を中心とした広域観光の推進、②として飯山新駅の知名度の向上、③として沿線県との連携により首都圏や北陸地域、関西圏からの誘客の取組など、6つのプロジェクトを掲げてございます。

15 ページ、「外国人旅行者戦略的誘致推進事業」でございます。今後増加が期待される外国人旅行者の誘致については、成長著しい台湾や中国、シンガポールを重点市場として位置付けました。また、最近東南アジアからの来訪も増えております。こういった国や地域への展開を見据え、各種メディアや旅行会社の招へい、観光説明会・商談会の開催、トップセールスなどを実施していきたいと考えております。

また、16 ページにありますが、中華圏からの個人旅行者を対象とした首都圏と長野県内の観光地を周遊するバスを運行しております。これは中華圏の皆さんにとって縁起のよい数字「88」を使い、「88元バス」、日本円にして1,200円程度の格安のバスを運行するもので、県内には国際空港がないというハンデをカバーしながら、海外の皆さんに首都圏からダイレクトにお越しいただく、その中で宿泊や土産品購入をしていただいて県内に経済効果が及ぶようなモデルをつくっていかうということで、官民一体となって現在取り組んでいるところでございます。

以上、駆け足で説明させていただきました。ご不明な点等はこの後の意見交換の中で補足をさせていただきたいと思っております。

最後に資料3、「統計から見る長野県観光の現況」という統計資料を提供させていただきます。これは、データをみながら長野県観光の課題などを浮き彫りにするための資料となっております。

6 ページ、「観光旅行者の推移」でございます。左側のグラフは観光旅行者数と観光消費額の経年変化でございます。観光旅行者数は平成3年をピークに、観光消

費額は平成 10 年をピークにだんだん低下し、減少傾向が続いているという現状でございます。これまでと同じような取組をしていたのではこの傾向を反転させるのは難しいと認識しております。

7 ページ、「スキー場利用者の推移」でございます。スキー場利用者もバブル期をピークに減少しているということでございます。ただ、ここ 2 シーズンは若干ですが増加という数字もございますので、こういった傾向から増加に転じたいと思っ

ているところでございます。8 ページ、「外国人宿泊者数の推移」でございます。真ん中上の棒グラフで示していますが、平成 17 年頃から増加しております。平成 21 年は新型インフルエンザ、平成 23 年は東日本大震災によって大きく落ち込みましたが、基本的には増加傾向にあります。本年についても好調とお聞きしておりますので、その取り込みを積極的にしていく必要があると考えております。

10 ページ、「観光消費額」でございます。右上のグラフは「宿泊旅行 1 回あたりにかかった費用」をお示ししております。この中で「現地小遣い」、これは飲食、お土産、入場料といったものがカウントされているわけですが、長野県はこれが全国と比較して少ないので、いかに高めるのかということが大きな課題になってございます。

11 ページ、「宿泊施設数」でございます。右上の棒グラフにあるように、長野県は宿泊施設数が全国で一番多いという現状がございます。その内訳としては簡易宿所、ペンションや民宿といった形態の施設が非常に多いという状況でございます。

このように宿泊施設が一番多いわけですが、次の 12 ページの「客室稼働率」のグラフがお示ししているように、客室稼働率は全国最低水準というのが現状でございます。観光産業の中で大きなウェイトを占める宿泊事業をどのようにしていったらよいか、これも大きな課題と考えております。

20 ページ、「旅行者の満足度」でございます。右上の表には旅行者の満足度の全都道府県の中での順位が示されております。「総合的な満足度」については 9 位という評価をいただいておりますが、「地元ならではのおいしい食べ物が多かった」「魅力のある特産品や土産物が多かった」になりますと全国の中での評価が低くなっており、この辺りをどのように魅力アップしていくかが大きな課題となっております。

25 ページ、「旅行タイプと旅行先」でございます。旅行タイプ別の行ってみたい旅行先についてのアンケート結果で、長野県はどういった旅行タイプで人気があるのかということですが、「高原リゾート」「登山・山歩き」「スキー」については全国第 1 位の評価をいただいております。こういったものをいかに伸ばしていくのかも課題のひとつと考えております。

時間の都合もありますので、説明は以上であります。よろしくお願いたします。

(清水会長)

ありがとうございました。

大変膨大な中身でございまして、すぐにはご理解いただけない部分もあろうかと思いますが、限られた時間でございまして、これから意見交換に入りたいと思います。

先ほども申し上げたとおり、本日は初めての審議会でございますので、最初に各委員さんから、観光への思い、長野県観光へのご意見、そういったものを自己紹介がてら3分程度でお話しいただければありがたいと思います。また、お話の中に県への要望などがございましたら、途中で区切り県の方でお答えいただく機会をつくりたいと思います。

それでは、岡庭委員さんからお願いいたします。

(岡庭委員)

岡庭でございます。私は、前回もこの審議会の委員を務めさせていただき、新しい観光計画づくりに参加させていただいたところでございます。

この計画については、例えば「山岳高原リゾート」という表現の是非を含めて検討し、非常に様々な点から考えながら今回の形になったわけでございます。私も町村でございますから、この県の計画を実行に移すことが我々の仕事になってくるわけでございます。

それで、先日も町村会の観光に関わる団体が意見交換をしたわけですが、観光産業全体が非常に厳しい経営環境にあるというのが町村長の皆さんの一様の認識であったように思います。私の阿智村も昼神温泉を抱えておりまして、県が打ち出したこの観光計画をどういう形で受けとめ、これから実行に移していったらいいのかという点については、非常に悩みが多いというのが実態でございます。

町村会の意見交換の内容を紹介すると、耐震改修促進法の改正により、旅館をはじめ不特定多数の方が利用する建築物の耐震診断が義務づけられ、診断結果を公表することとされていますが、山ノ内の町長からは、多くの旅館の皆さんがその対応に苦慮されているというお話がありました。それから、ある村長からは、観光を一村だけで考えられないということになると、公共交通機関のネットワーク化でお客様に来ていただけるような施策を県として考えていただきたいというお話もありました。

そういう点では、市町村がこの観光計画を実行に移す上では、具体的な課題等について十分に話し合いながら取り組んでいくことが、計画の実効ある推進につながるのではないかと考えています。

一つ楽しみに思っていることは、昼神温泉で星空ナイトツアーを企画したところ非常に好評だったことです。7月27日から大体14,000～15,000の方が星空を見に来ていただいています。多いときには一晩に千人くらいの方がいらっしやって、星の见えない夜もあるわけですが、皆さん本当に満足してお帰りになっているとお聞きします。そう考えますと、山岳とか自然というテーマをもっと前面に出して長野県観光を考えていけば、可能性は非常に大きいのではないかと感じたところです。

いつも現場の課題を厳しく指摘して申しわけないと思っておりますが、現場はそんな状況でございます。よろしくお願ひしたいと思います。

(清水会長)

ありがとうございました。

それでは、加藤委員さんお願いいたします。

(加藤委員)

皆様こんにちは。リクルートライフスタイル、じゃらんリサーチセンターで主席研究員をやっている加藤と申します。

簡単に自己紹介させていただきますと、じゃらんリサーチセンターは国内旅行市場の調査研究機関でございます。こういふと、よく「シンクタンクですか。」と聞かれますが、私はその度に「アクトタンクを目指しています。」と申し上げております。

調査研究や実態把握だけをしていると、どうしても毎年減少傾向をご報告することになってしまいます。そうではなく、なんとか需要を創り出して市場を活性化できないかという思いで地域の皆様とともに取り組めたらと考え、「行動するタンク」でありたいと思っております。

観光計画の長野県観光の現状の中で「じゃらん宿泊旅行調査」という私どもの統計を多く使っていただきまして、非常にありがたいことだと感謝申し上げます。

私自身の長野県との関わりといえば、観光やプライベートでよくおうかがいさせていただいていますが、若い頃10代から20代のうちは、スノーリゾートにワンシーズンに何回も訪れさせていただきました。

ただ、若い時にはバスに乗ってスキー場に行っても、帰ってからそれが長野県だったのか、新潟県だったのか、福島県だったのかということが実はみんなよくわかっていないというのが実態でございました。ただ、野沢温泉で外湯めぐりをしたりとか、ふと食べた野沢菜がすごくおいしかったりすると、ここは長野県だなということがすごく心に残っています。

さまざまな魅力を持つ信州ですので、そういった魅力に惹かれていらっしゃったお客様が、多様な魅力を繋ぎ合わせて長野県を一体として理解できるような、そして心に残るような、そういう観光振興のお手伝いができればすごく幸せに存じます。

若輩者で皆様に教えていただくことの方が多いかと思いますが、私なりに一生懸命務めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

(清水会長)

ありがとうございます。

それでは木村委員さん、お願いします。

(木村委員)

皆さん、こんにちは。私は、自ら手を挙げてこの審議会に参加させていただきました。名簿を拝見するとお歴々ですので、私なんかは何のお役に立つのかという心配をしながら、今お話をうかがっておりました。

私自身はまさにスキーが好きで、スキー場に通うご縁で、20年前に東京から長野に引っ越してまいりました。

今、飯山で観光の仕事をしていますが、長野新幹線の延伸により長野駅の次に飯山駅ができるということで、飯山市民として大きな期待をかけています。新幹線が来ることで観光やまちづくりをどのようにしていこうかとか、既存の観光地をどのように磨き上げていこうかとか、いろいろな期待を抱いて、我々もミッション（使命）を持って仕事をしているところです。

今、新幹線の新駅をゲートウェイやワンストップの機能、ハブとしての機能といったいろいろな機能を持たせて開業させようという機運の中で、この審議会の中でどんなことが提案できるのかとか、また、地域の皆さんがどのように考えていらっしゃるのかとか、大いにいろいろな情報を得ながら我々の地域に役立てていきたいと考えています。また、新しいゲートウェイのあり方については、審議会の中でともに考えながら提案などさせていただければありがたいと思っています。

飯山は、スキー旅行が大分落ち込んでくる中で、グリーンツーリズムやエコツーリズムといった新たな観光要素を取り入れて、多くの皆さんを受け入れようという機運が高まっている地域です。私自身としては、新幹線の延伸を控え、滞在に耐え得る観光地というものを模索していきたいと思っています。1泊2日、2泊3日で滞在をされていた方が4泊、5泊、10泊という宿泊体系に変わること、観光の受け皿だけではなく、今の商店街や飲食店、それから交通事業者なども大きく様変わりする必要がありますので、そういう意味では、新しい観光地をつくるには長期滞在を柱に据えていきたいということで、我々のセクターもそういった滞在型の旅行商品をつくったりしています。

いろいろと勉強させていただきながらとなりますが、観光の話、楽しく審議会に参加させていただきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

（清水会長）

ありがとうございます。

それでは、駒谷委員さん、お願いいたします。

（駒谷委員）

駒谷でございます。私は、スキーの業界に40年、どっぷりとつかっている者でございます。先ほどの資料説明で、スキー場の現況というのを皆さんつかんでいただいたと思います。いいときの大体30%、売上比率でいくと30%を割っているというのが現況でございます。

それからもう一つ、長野県は宿泊施設の件数が一番多いという状況がありまして、簡易旅館、いわゆるペンション・民宿が非常に多いわけです。スキー場を取り巻く宿泊施設には、こういう簡易旅館が多いわけです。最近、どういう現象が起きているかという、この宿がどんどん減っています。例えば私どもの観光協会の会員の数からしますと、ここ10年で大体35%ぐらい減っております。

それで、今あるお宿さんにお話を聞きますと、「来年、再来年はわからない。」と

いうお宿さんも非常に多いわけですが、これを何とかしなければいけないというのが、今、スキー業界だけではなくて、長野県全体の観光の大きな問題になるのではないかと思います。

そのようなことを踏まえ、観光計画では「みんなで取り組む合言葉」として、「もう1泊」宿泊してもらおうという合言葉をつくっていただいております。特にスキー場においては、今年は「もう1泊運動」を徹底してやろう、もう1泊してもらえるにはどういう方法があるのか、これをみんなで模索しながら、積極的に取り組んでいきたいと考えております。

今日ご出席の皆さんは、いろいろなジャンルからおいでいただいております。これから大変参考になるご意見をいただけたらと思うので、是非、我々もご意見をいただきながら、特にスキー場の場合は冬の基幹産業として大きな立場がございますので、何とか長野県観光の振興にしっかり取り組んでいきたいと思っておりますので、よろしくご指導いただきたいと思っております。ありがとうございました。

(清水会長)

ありがとうございました。

それでは新宅委員、お願いいたします。

(新宅委員)

新宅でございます。お願いいたします。

私も、木村さんと同じく、立候補して委員にさせていただきました。9年前に軽井沢に引っ越してまいりまして、軽井沢観光協会という組織に勤めておりまして、いつも「軽井沢はいいよ。」「長野はいいよ。」というPRをしております。

もうそれが楽しくて、長野にはまだまだいろいろな発見があって、軽井沢の中でもいろいろな発見があって、旅行に行って帰ってくるたびに、「ああ、やっぱり軽井沢はいいな、長野はいいな。」と思い、それを一人でも多くの方に伝えていきたいということで、今、活動しています。

軽井沢も、長野県全体の統計と同じように、宿泊数が減っています。今、観光協会が一番PRしたいのは、何といても長野県の朝が素晴らしいということです。実は私、朝はあまり強くないのですが、それでも朝早く起きると、もうすがすがしくて気持ちよくて、冬の朝はきらきらとしたダイヤモンドダストを見れたりとか、夏の朝起きたときの爽快さといったことをPRしたいと思っています。今、軽井沢町では、早くに朝ごはんを食べられるところ、カフェが多くオープンしてまして、まだわずかですが、「朝もいいよ。」ということをやメディアや旅行者の方々にお伝えして、何とか泊まってもらえるよう取り組んでいます。

今年の夏、軽井沢町は去年より多くの方に来ていただいたのですが、冬は宿泊数が減りますので、まだまだいろいろな取組ができると感じています。

是非この審議会でも、私もできる限りのことを勉強して頑張っていきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

(清水会長)

ありがとうございました。

それでは、鈴木委員さんお願いいたします。

(鈴木委員)

漫画家の鈴木ともこ と申します。私のような者が場違いではないかと、力不足ではないかと、今もすごく緊張しているのですが、大好きな信州のために少しでもお役に立てればと思い、お引き受けいたしました。

私はもともとインドア派で、本当に運動音痴で、山とは縁がない者だったのですが、それが7年前に木曾駒ヶ岳に行ったことをきっかけに山の世界にはまりまして、「山登りはじめました」という自分の体験を題材にしたコミックエッセイを出し、2011年5月に東京から松本に移住してまいりました。

日々、山のみならず、信州のまちの魅力、そして人の魅力というものを実感しながら、信州のどこがいいか、松本のどんなところに魅力を感じているかということ語り出したら、多分一人で2時間ずっとしゃべり続けられるというぐらい惚れ込んでおります。

そういったことを、今、本や雑誌でご紹介したり、東京や名古屋などでの講演会で実際に魅力を伝えております。最近、松本観光コンベンション協会のご依頼で、自分で実際に行って感じた上高地の魅力を伝え、もっとゆっくり過ごしていただくという思いを漫画にして、こうしたガイドブックとして無料配布していただきました。また、こちらは20代、30代の方がよく読む「ランドネ」というアウトドア雑誌で、この最新号には、私が書いた松本の記事が掲載されています。登山で松本に来る方は多いのですが、山を降りたらすぐ帰るということではなくて、やっぱりまちの魅力を知っていただきたいということで、登山の前後に松本で1泊してたくさんのお店や人と触れ合い、まちの魅力を感じてもらうように、実際に自分が好きなお店を文章やイラストでご紹介しております。

それで、友人たちも多く松本に来るのですが、皆さん松本城ぐらいしか印象がなかったものを、一緒に連れて歩いて地元のお店の方と触れ合ったり、新しくできたお店でお話なんかをすると、もう皆さん惚れ込むんですね。そして、次はもっと長くいるとあって、1泊だったのが2泊になり、夏に来たのが今度は冬に来るとなっています。他のまちも含めて、信州にはそういった魅力がとてもあって、あとは、それをどう伝えていくかだと思いますので、そういったことで、私も何かお手伝いできればと思っております。

観光計画の表紙に『「信州暮らし」が感動を生む。』とありますが、私はまさにそれを毎日実感していて、毎日毎日「信州ってすばらしい」と思っておりますので、そういった気持ちで務めさせていただければと思います。よろしくお願いいたします。

(清水会長)

ありがとうございました。

それでは高野委員さん、お願いいたします。

(高野委員)

旅館ホテル組合会からまいりました、専務理事の高野でございます。

先ほど岡庭委員の方から旅館業界のお話が出ましたが、昨年の県内の旅館ホテルの倒産件数は、過去最高、全国最高でした。

こうした厳しい状況の中で、これまで我々の業界は、例えば、金融機関に対して陳情したり、融資商品の充実をお願いしたり、あるいは県観光部さんや市町村の皆さん方と経営改善をしていくための研修講座等をやってきました。今までは、そういう形で助け合って何とか生き残りをかけて取り組んできましたが、面積が5,000㎡以上で昭和56年以前に建てられた旅館等の耐震診断義務化などの問題が生じており、非常に不安が広がっております。

これまで金融円滑化法の返済猶予が経営破たんの歯止めになっていましたが、今年の3月末にその特例の適用が終了したため、全ての旅館が返済猶予のなくなった状態での経営計画を考えている状況です。国の中小企業再生支援協議会等で対応してもらえているところは5か年計画などがつくられ、新しい枠組みの中で経営していけるかもしれませんが、そうでないところは、もう破たんを待たなければ仕方がないようなところも多いという状況です。

そういう中で、全国最多の宿泊施設数を誇る長野県の旅館業界にとっては、今年、来年が一番の山場になるのではないかと考えています。平成27年の新幹線延伸、それに続く4月、5月の善光寺御開帳までもつかどうか、というところまで来ています。

今、各旅館は、下降スパイラルの中で、例えばコストカット、サービスカットという方法で何とか切り抜けているわけですが、売上の上昇が見えない中では、一旦は利益を維持できても、その先がない状況です。

そういう中で、今の客層をみて感じていることは、旅行をする若い人が少なくなっているということです。じゃらんnet、楽天等のウェブサイトでも、10年前にウェブサイトが盛んになってきてから5、6年前までは、ネットを活用した旅行といえば若い人たちがカップルで来たりとか、ファミリーで来たりという印象がありましたが、今ではそうやってネットを利用して来るお客さんは、ほとんどが高齢の方なんです。60代や70代、リタイヤされた方がほとんどという状況です。

このようにパイも減り、売上を上げようがない中でコスト削減だけはしているという厳しい財務状況下では、需要を喚起していくこともなかなか難しいのではないかと思います。

そんな中で、先ほどの岡庭委員さんのお話にもありましたが、今どこへ行っても屋神温泉さんの星の里が有名です。そういった部分に着目して、私どもの地元千曲市でも姨捨の棚田をキーポイントに、JRさんに夜景を楽しめる「ナイトビュー姨捨」という臨時列車をつくっていただいたり、また我々でバスを出して夜景を楽しむツアーをつくったり、昼間の散策のガイドをしたりし始めています。

ですから、そういった部分で、単に生き残るために財務のことを考えるだけでは

なく、楽しみ方の提案というのを一緒に考えていただければありがたいと思い、今回も頑張ってもらいたいと思います。以上でございます。

(清水会長)

ありがとうございました。

竹村委員さん、お願いいたします。

(竹村委員)

J R長野支社の竹村でございます。昨年の秋に交通事業者の立場でご指名を受けまして、引き続き参加をさせていただいております。

私どもJ Rの方では、観光列車ですとか、企画列車という列車がございますが、そういった列車を運行する中で、地域の皆様と連携しながら、地域の素材をどうやって掘り起こし、また、お客様にどんなおもてなしができるのだろうかということ、今、いろいろと取り組んでいるところでございます。

具体的にいうと、長野ー南小谷間を松本経由で往復する「リゾートビューふるさと」という列車がございます。これについては大北地域と安曇野市の観光団体で組織される「大糸線ゆう浪漫委員会」の皆さんと、地域のおもてなしのボランティア団体の方、こちらは6団体ほどいらっしゃいますが、その方たちと連携して、来た方に感動を持ち帰っていただく目的で、今取り組んでおります。

それから、高野委員のお膝元、千曲市でも「ナイトビュー姨捨」という列車を、今月もまだ19、20、21日と3日間走りますけれども、姨捨の夜景を楽しんでいただくということで運行しております。これも地域に語り部の方ですとかいろいろなボランティアの方がいらっしゃいまして、ご協力をいただきながら、地域と一体となってどうやって売っていかうかということ、今一生懸命やっています。

それから、木村委員の飯山の方でも、6月に「走る農家レストラン」という列車を運行させていただきました。この秋も地元の食文化の会の方たちのご協力をいただきながら、食材をはじめ地元の本当に素朴な物を売っていかうということで、少しでもお役に立てればということで、今取り組んでおります。

いずれにしても、私どもが列車を運行しただけではお客様は集まらないので、地域の皆様と一体となって取り組ませていただくということが非常に大切だと思っています。これからもそんなことをやっていきたいと思っています。

それと、あともう1点、新しい観光計画が策定されましたが、私どもの駅長もその詳細を知らないというようなことがありまして、この冊子を用いて私の説明で周知を図ったところです。

いずれにしても、「信州暮らし」を、我々も観光に関わる交通事業者としてしっかり受け止めながら、自分たち自身も「信州暮らし」を楽しんで情報発信をしていきたいと思いますということで今取組を始めております。皆さんのいろいろなご意見をうかがいながら取り組んでまいりたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

(清水会長)

ありがとうございました。
仲野委員さん、お願いします。

(仲野委員)

仲野敦子と申します。私一人だけ肩書きが「元」となっておりますが、2007年から2011年まで、マレーシアの船で2年間、イタリアの船で2年間、外国籍クルーズ客船の乗務員として勤務をしていました。

そのあと長野県に帰ってまいりまして、長野県観光PRキャラクター「アルクマ」のキャラバン隊のメンバーをやっていました。ですので、この5、6年で国内外の観光地を結構回ってきております。

いろいろ回ってみて一番思ったのは、やはり観光は、まずイメージが大事であるということでした。特に海外に関しましては、一度来て気に入ったから再訪したという方も多くいらっしゃいますけれども、やはり高いお金を払って行くからには、イメージのいいところ、楽しそうなところに行こうという方が多くて、そういう意味では、長野県はイメージはいいのですが、そのイメージが散漫になり過ぎていて、観光資源を無駄にしてしまっているというのが率直に感じた意見です。

アルクマキャラバン隊のときには、県内の南から北まで、それから県外に出ることもあったのですが、県外のPRの場にいらっしゃる方とお話をすると、「ああ、信州っていいところよね。」とおっしゃってくださる方は多いのですが、それはどちらかという高齢の方の若かった頃のイメージであって、若い方には長野県に対するイメージ自体があまりないという雰囲気があります。

今回、この審議会の委員の公募を知り、長野県について熱く語るという思いを抱いて応募し、審議会に参加させていただくことになりました。私は、皆様のように何かの分野に精通しているわけでもなく、経験や知識も不足していますが、一般の方に一番近い感覚で審議会に参加できるのではないかと考えております。

それから、外国に出ていた関係で、海外での知名度という点でも長野県はやはり非常に低かったというのが正直な感想でしたので、そういったところでも私の経験が何かの役に立てばいいなと思い、発言させていただくようにしようと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

(清水会長)

ありがとうございます。
それでは、波瀾委員さんお願いします。

(波瀾委員)

皆様、はじめまして。JTB総合研究所の波瀾と申します。どうぞよろしく願いいたします。

資料3にツーリズム・マーケティング研究所という出典の資料がありますが、この会社名を約1年半前、JTB100周年にちなんでJTB総合研究所に変更し、旅

行会社がやっているシンクタンクとして少しでも地域の皆様のお役に立ちたいということで、設立させていただきました。私はもともとJT Bの人間で、設立メンバーとしてどうやったら皆様のお役に立てるのかということを考えさせていただく役目を申しついております。

基本的には、どういうキラーコンテンツにしていこうかと考えたときに、JT B総合研究所としては、生活者の視点で立ちましようということ、グローバルで考えていましようということ、あるいは、鉄道やLCC（格安航空会社）など交通インフラの影響を消費者の目線できっちりとつかんでいましようということ、現状だけではなくて未来予測をやっていましようというブランドスローガンをそのときにつくりまして、「未来予想地図つくります」というものですが、そういった心づもりで活動しております。

私自身はどちらかというと、ずっと販売施策ですとか、JT B首都圏の方で支店長も経験しております、それとは別に広報室長をやっておりましたので、広報経験が長いんです。それで、いつも部下には「何を発信したかということにこだわっては駄目で、相手がどう受けとめたかということにこだわりなさい。」ということを言っていました。あと、広報というのは会社の中では大体いつも嫌われ者で、「これ発表しましょう。」とか、「一発で終わらせられるから、開示した方がいいですよ。」とか、危機管理でみんなが嫌がることも言わなければいけません。商品発表のときとかも、「これってイベントじゃん。」とか、「持続性はあるのか。」とか、「どうやって社会と繋がっているのか。」とか、ずっと言い続けておりました。

そのせいか、今でも海外のメディアやガイドブックの方とはよく一緒に仕事をしております、そういった方たちとよく話すのが、いろいろな地域の方たちがよくプロモーションビデオを見せてくれたりとか、セールスに来てくださるのですが、その違いがわからないということです。それは多分日本の観光客からも言われているのだと思いますが、なぜその地域に行かなければいけないのかということが海外から見ると割とわからないんだよね、という話をしています。そういった目線で、私も「わかりやすい発信」が商売になっていますので、お役に立てればと思っています。

私はお隣の新潟県出身なのですが、そういった視点で長野県について言わせていただくと、実は長野県じゃないとできないことがいっぱいあるのではないかと考えております。長野県と北の山形県が出るたびに、新潟県もちょっと頑張れよと思っておりました。

あとは、私は、たまたま業界紙で連載を持っていて、そのテーマが「選ばれる地域を目指して」ということで、先ほどのごあいさつで加藤副知事が「選ばれる」という言葉が使われたときに、大共感を受けました。どうやったら選ばれるかということで、何か皆様のお役に立てればと思っていますので、どうぞよろしく願いたします。

（清水会長）

ありがとうございます。

それでは、牧野委員さんお願いいたします。

(牧野委員)

飯田市長の牧野でございます。市長になる前は、日本開発銀行、今の日本政策投資銀行というところにいまして、転勤族として各地を回りながら地域づくりのお手伝いをしていました。ちょうど10年前は大分事務局長をしておりまして、今の「別府八湯温泉泊覧会」(オンパク)の原点となった別府のまちづくり、「豊後高田昭和の町」の立ち上げ、こういったものに関わっておりました。あるいは、日銀の大分支店長さんや大分銀行経済経営研究所の所長さんと一緒になってツーリズムシンポジウムを行いまして、元観光庁長官の溝畑宏さん、当時は大分県庁で企画部長をされていた方ですが、と議論するきっかけになりまして、「ツーリズムおおいた」を立ち上げることになりました。その初代会長は由布院玉の湯の桑野和泉さんでした。

こうした大分県での経験は、観光振興というよりは地域づくりが多かったので、こういったことがどれだけ観光審議会のお役に立つのかはわかりませんが、こうした経験がございます。

飯田市長になりまして、人口減少、少子・高齢化が進む中で私が特に課題にしておりますのは、中山間地域の振興でございます。観光の観点で中山間地域の振興をどのように図っていくかと考えると、平成8年から体験教育に取り組んできた飯田市は日本でも有数の体験教育のメッカに育ってきていると思っておりますが、これから先はやはり厳しいものがあると思っております。

例えば、これから紅葉シーズンになりますが、飯田市内の南アルプスの麓、旧上村のエリアに下栗という地区があります。この地区は、ここ2、3年で非常に注目されていて、大変多くの観光客に訪れていただいておりますが、交通インフラも施設等もなかなか受入ができる状態になっておりません。

地区の皆さんといろいろとお話ししますと、高齢化率が50%以上となりだいぶ少子・高齢化が進んでおりまして、そういう状況下で将来を確かなものにするための新しい投資をすることについては、みんなどうしても消極的になってしまうと言うのです。今はいいかもしれませんが、この先5年、10年と本当にこういった傾向が続くのかも定かではありません。人口が減少し、少子・高齢化が進む中で新しい投資をするということは、非常に勇気が要ることだとあらためて感じているところであります。

やはり、将来計画の立案に向けて客観的なアドバイスができる専門家チーム、タスクフォースの必要性を感じておりまして、この審議会の委員の皆さんも専門家でありますので、そういった形で地域に入っていただき、客観的なデータに基づいて、あるいは科学的な将来予測に基づいた形でお手伝いをしていただけるような仕組みができないものかと感じています。

私どもの飯田地域は、環境の分野では実際にそのような取組をやっています。今、再生可能エネルギーの関係で、これは特に中山間地域の環境産業の振興という面があるのですが、地元が主体になって事業を立ち上げようとしたときに、専門家チー

ムに入ってもらって、実際に立ち上げができるかどうか、かなり突っ込んだ議論をしているところです。

この右肩下がりの時代では、観光の分野においても、こうした専門家チームによるアドバイスや支援が非常に必要になってくると思っています。以上です。

(清水会長)

ありがとうございました。

それでは、松本委員さんお願いいたします。

(松本委員)

ちひろ美術館の松本でございます。

今から16年ぐらい前に、安曇野の松川村にちひろ美術館をつくりまして、当時は観光地でも何でもなかったのですが、おかげさまで、何とか潰れずにやっております。

なぜ松川村につくったのかといいますと、ここはもちろんいわさきちひろに縁のある地ではあるのですが、実は、安曇野にはすごくたくさんのお美術館があったんです。私は当初から、一つの美術館だけで戦うことはほとんど不可能だと思っておりまして、南仏の美術館ゾーンのような形で美術館ゾーンをつくれば、いろいろな形でプラスになるのではないかと思います、当時の6市町村の首長さんたちに声をかけて「安曇野アートライン」というものをつくりました。一つの施設だけでは成り立ちにくい美術館という施設をどうやって連携させるかということを考えてわけです。

そのあと県立信濃美術館の館長時代には、「善光寺平アートライン」というものにも取り組みましたが、その際もやはり文化ゾーンをつくっていくということを意識しておりました。

私は今回でこの審議会は2期目となりますが、実は、「信州暮らし」というキャッチフレーズにかなりこだわりを持って発言してまいりました。どういうことかという、これは哲学だと思っているのです。戦後のものすごい高度成長期においては、便利なことがいいこと、速いことがいいことというように展開されてきました。その象徴的な出来事の一つが原発の事故だったと思います。今は、私たちの生き方自体が問い直され始めている時期だと思います。そのときに、どういう生き方を選ぶのかということが、実は観光にも関係してくるのだらうと思っているのです。

もともと人間というのは、自然の一部であります。今もそのはずなのですが、自然と一体となって生きることによって喜びを感じる人生観、実はそれがこれからの観光の理念につながるのではないかと私自身は考えたのです。

その中で、「信州暮らし」というものは自然と一体化できる、その暮らし方、そこには低農薬の農業があったりとか、水を大切にするとか、いろいろなものがつながってくるとは思います、そういう生き方を外から来る人たちに一緒になって喜んでもらえる、あるいは、そういう生き方をしている人たちを応援したいと思う人がそこにやってくるというのが、この長野県の観光のベースであって欲しいと思っています。中長期の将来展望の問題と、短期の明日どうやっていくのかという問題、も

もちろんこれらは両方とも考えなければいけないこととっていますが。

今自然の問題を申し上げましたが、実はもう一つ、長野県の大きな武器として、文化的な財産があると思っています。例えば美術館の数に関して言えば、長野県は、東京都に次いで全国で2番目の数があります。博物館は3番目でしたか。そういう文化的な資産を持っていながら、ほとんど活用できていない。それからもう一つ、歴史に関してそうだと思います。県内の各地域にたくさんの歴史がありますが、それをきちんと活用し切れてないような気がします。

例えば、資料2の外国からのお客さんにどうやって訪れてもらうかという施策のところで、最重点地域として台湾とか中国とか幾つかありましたが、韓国は重点地域には入っていますが、最重点地域になっていませんでした。私の個人的な考えを申しますと、県内の古墳という、例えば積石塚の古墳群として著名な大室古墳群などいろいろあるのですが、その多くが朝鮮系の古墳なのです。ですから、安曇野というのもおそらくその流れなのですが、そういうベースの文化が実はここには埋もれているのですね。それを発掘していくことによって、例えば韓国から旅行者を呼び込むという可能性もあるのではないかと思います。

文化の問題についてももう一つ申し上げますと、この長野県には、軽井沢もそうですし、蓼科、白馬や安曇野もそうなのですが、大変たくさんの文化人が住んでいます。作家もいれば、画家もいれば、鈴木ともこ委員さんのように漫画家もいらっしゃる、そういう人たちをもっと活用すべきだと、実は私は思っています。

いろいろな戦略を練るということは、日本中のどこの県でもやっていることなのですが、例えば長野県を舞台にして作家にどんどん書いてもらうとか、テレビのプロデューサーに対してそういうものをアピールをしていくとか、あるいは出版社の編集者に対して企画パッケージを提示していくとか、そういう形でのアプローチの仕方というの、観光戦略として考えていったらいいのではないかと思います。以上です。

(清水会長)

ありがとうございました。

それでは、横山委員さんお願いします。

(横山委員)

料理研究家をしております、横山と申します。

今、松本委員さんがおっしゃられたように、長野県というのは、本当にすごいものをたくさん持っていると思います。それから、自然がいいと言われておりまして、自然は壊すことは簡単ですが新たにつくり出すことはないわけで、それはどんなに科学が進んでもできないことですから、やっぱりその自然をしっかり活用していくということが、とても大事なことのようには思います。

それから、長野県は男女とも長寿日本一になりました。この日本一というのは、言ってみれば世界一だと思います。今、この長寿であるという事実と自然を一体にして前面に出し、もっとPRして、信州へ行くと食べ物も安心・安全だし、自然も

いいし、何か元気になれそうというイメージを皆さんに発信していけたらいいと思います。

それから、吉永小百合さんが戸隠にお見えになって「神々しい空気が漂っている」と言われていたのが、今ではあの静寂な場所に人波で行列ができて、埃がたつほどの人ごみと言われております。

今、松本委員さんがおっしゃられた、どういう生き方を選ぶかということに通ずるかと思いますが、やはり、目に見えないもの、神とか、気とか、ご利益とか、そういうものが信州のいたるところに潜んでいると思います。そういう見えないものを自然や食と結びつけてアピールするということは、新しい試みになるのではないかと思います。

それから、食というのは大事なことなのにもかかわらず、信州に来ても本当に信州らしいものが簡単に食べられないというところが、とても不安な材料だと思います。信州というのは南北に長いものですから、郷土料理とか、行事食とか、そういうものを一括りにして「信州はこれ」というようにできないところが、信州の素晴らしいところだと思うのです。南信と北信はもちろん、中信でも全然違いますし、南に行くとお祭りがとても豊かでお祭り街道というものがあるくらいですから。是非、何かそういうものと結びつけて、そして、新幹線が金沢まで延伸しますが、新幹線の中でも信州らしいお弁当が食べられる、駅弁でも食べることが可能になれば、では降りて泊まって食べてみようとか、そういう行動にもつながってくると思います。

それから、信州というのは、皆さんよくご存じのように、伝統野菜の多さというのがすごいです。昨日も2、3点認定されましたが、68種類ぐらいに増えているのではないかと思います。伝統野菜というものは、各地のごく限られた場所でしか採れないものです。例えば南の伝統野菜の種を北に持ってきて植えても同じものにはならないわけです。その土地、そこに照る太陽、そこに吹く風、そこに降る雨、それだけあれば伝統野菜が育つ、こうした素晴らしい個性的な野菜が長野県はとても多いわけです。京野菜だの、それから金沢の伝統野菜もすごくおいしそうに見えますが、長野県の伝統野菜はその倍の種類があるわけです。この埋もれている宝をもっと私たち県民一人ひとりが意識して、それを取り寄せて食べるのではなく、その土地に行って郷土料理として食べるという、そうした試みも、皆さんに来ていただく大事なポイントになると思います。

伝統野菜が多いということは、長寿とつながってしまして、長野県民は、日本で一番野菜を食べ、果物を食べている県民であるわけです。それで長寿ということになっていますので、そうしたつながりを十分にPRしていくことがとても大事なことでと思います。よろしく願いいたします。

(清水会長)

ありがとうございました。

それでは、御代田委員さんお願いいたします。

(御代田委員)

はじめまして、KPMG FASの御代田と申します。

「KPMG」というのは何者なのだということを思っいらっしゃる方が多いのではないかと思います。簡単にご紹介させていただきますと、我々は有限責任あずさ監査法人の子会社として、企業などの再生、コンサルティング業務を行っている会社です。

私はその中でも、ホスピタリティ・サービスグループに所属しておりまして、ホテルですとか、官公庁や地域のお仕事をさせていただいています。

我々の業務は、ホテルに関する仕事は結構多いのですが、今回いろいろな委員さんから宿泊施設に関するお話が出ているという印象を持ちました。実は、私個人としては、以前建設コンサルタントだったということで、景観づくりのお仕事もしておりまして、まちづくりのお仕事をする中で地方に行くと温泉旅館などをよく目にするのですが、それらがすごく元気がない、寂れている、という状況をどうにかできないものかと思っまして、それはやはりホテル・旅館一つひとつが頑張らなければいけないのではないかとということで、再生のお仕事に携わりたいと考えて今の会社にいます。

このように、いろいろなところでお仕事をしているのですが、その中で、長野県のブランドづくりと同じように、今観光庁でもブランド観光地域（仮称）に取り組んでいまして、こちらのお手伝いを清水会長と一緒にしております。そこではブランドづくりについてずっと同じ議論をしておりまして、そこで大事なことは、やはりそれぞれの宿泊施設、お土産物屋さん、交通サービス、それぞれの場所でその地域ならではの、ここにしかない独自の価値というのは何だろうということを掘り起こしまして、それをそれぞれの場でいかに提供していくか、それによってお客さんが来訪したときに、この地域というのはこういうイメージなのだというイメージが形成されるのではないかと、という議論をしております。

そのためには、地域マネジメントもやはり重要になってくるだろうという視点で、今、国の方でブランド観光地域（仮称）の整理を進めている最中です。やはり、ブランドづくりでは、それぞれの場での独自の価値の提供を、地域の中でいかに連携してやっていくのかということが大事ではないかと考えております。

長野に関しては、本日は飯山の木村委員さんがいらっしゃいますが、昨年度、信越9市町村の会議でワークショップに参加させていただいておりまして、その中で、地域の独自の価値とは何だろうということをいろいろ議論をしておりました。そのワークショップで言っていることと、今回出ている「しあわせ信州」「信州暮らし」というキーワードは、まさに同じことを言っているなということを今日あらためて実感しました。自然と共生し、一体となって暮らしていくという、都会にはないここならではの暮らしというのが、やはり長野の一番のよさなのではないかと感じています。

そういったところは、観光事業者だけではなくて、いかに地域の人たち一人ひとりがそれをちゃんと認識し、それぞれの場でできることを提供していく、伝えていくということが、やはりこの長野のブランドイメージをつくり上げていくのではな

いかと感じております。以上です。

(清水会長)

ありがとうございました。一通りご発言をいただきました。

先ほど事務局から説明がありましたが、県では「信州暮らし」をキーワードとする新しい観光計画をつくり、今年度はこの計画を推進するため、山岳高原観光地づくり、おもてなし、信州ワインバレー構想など具体的な施策に取り組んでいます。

ただ今の皆さんからのお話をおうかがいしますと、この流れについては皆さん方が概ねご認識をいただきながら、それをどうやって具体化していくのか、加速していくのか、そのような観点でご発言をいただけたと思います。

これからは、限られた時間となりますが、先ほどご紹介のありました平成25年度事業について、では平成26年度はどういったものを重点的にやっていったらいいのかという点に議論を進めていきたいと思っております。

一つだけ申し上げますと、今回この審議会を運営するに当たって、「信州暮らし」という高尚な理念を我々が自慢し、誇りにし、それを展開する中で、お客様と一緒に楽しもうではないかという思いは、ほぼ共通の認識として持っていていただいているわけですが、問題はそれをどのように具体化するかということです。

具体的に展開をしなければ、信州らしい暮らしを伝える中山間地がなくなったり、あるいは、そういったものの担い手となる観光産業も減ったりというようなことになり非常に苦しいわけですので、そういった意味で、これをどういった形で具体的に展開していくのかということが一番の議論のポイントでございます。そういった意味で、既に各地で具体的に活動されている方々を中心に今回審議会の委員が選ばれたと私は思っております。

あらためてそんな観点で、平成25年度事業についてのご意見、あるいは「信州暮らし」をどうやってさらに素晴らしいものにし発信していくかという視点での平成26年度の新たな事業、こんなところにご意見をいただければありがたいと思っております。

これ以降は挙手で、どなたでも結構でございますので、よろしく願いいたします。いかがでしょうか。

(鈴木委員)

資料を読ませていただき、私なりに考えたり、実際に話し合いに参加してみて、信州の観光振興策というのは、本当にものすごく丁寧に考えられていますし、方向性としてはすばらしいと感じました。

ただ、一人の生活者として冷静に考えてみると、観光情報は、雑誌もあって、テレビもあって、パンフレットもたくさんあって、さらに今はインターネットもあって、個人にとって著しく情報過多だと思います。そしてそのことで、かえって主体的に選択できなくなっている人も多いのではないかと考えています。

そのような中で、今回のこのイメージをどのように届けるのだろうかという率直な感想を持ちました。どんなコンセプトがあろうが、どんな戦略があろうが、最終的にはやはりどう伝わったかでしかないのです、中途半端にしかブランドイメージを構

築できなければ、簡単に埋没してしまうのではないかと思います。

例えば、大変申し上げにくいのですが、「しあわせ信州」というキャッチフレーズについても、「何がしあわせなのか」ということを想起できなくて、右から左に流れて印象に残らない可能性も大きいのではないかと感じました。

ただ、言葉は使い方次第なので、例えば槍ヶ岳の山頂でガッツポーズをしている登山者の笑顔とか、松本城の前で侍のポーズをして記念写真を撮っている外国人観光客の笑顔とか、農作業の間におばあちゃんたちがお茶を飲んで談笑している笑顔とか、湧き水の井戸で水に触れて楽しんでいる子どもの笑顔とか、具体的に信州でのしあわせなものや瞬間と一緒にポスターなどで見せてあげるというのも一つの方法だと思いました。

現在、「しあわせ信州」の写真、動画、漫画などを公募されていると思いますが、私が物書きとして言えることは、コンセプトや戦略、全体のディレクション以上に「表現に落とし込む作業」というのは、はるかに難しいということです。ですから、情報過多の中であって信州に特に興味のない人たちに見てもらえるもの、それをどうやって表現していくのかということにもっと時間と予算をかけて取り組んでいてもいいのではないかと思います。

それは、例えば、先ほど私がお見せした小雑誌みたいなものかもしれませんし、先ほど松本委員さんがおっしゃられたように、作家や文化人、私も含めてどんどん利用させていただきたいですし、「表現」というものにもう少し時間をかけて考えていくのもいいのではないかと感じました。

あと、もう一つですが、ブランドコンセプトの中に、もっと強化した方がいいと思う点も感じました。私は信州に移住してまだ3年ですが、信州のよいところは、人、自然、古いものの3つだと思っています。人は、健康長寿、勤勉で教育熱心な県民性、おもてなしの推進など、先ほどの資料の中にもありました。自然は、もう本当に言わずもがなですが、自然の美しさと環境との共生、山岳高原を活かした世界水準の滞在型観光地づくりとして触れられています。ですが、古いものに対してあまり触れられていないのが気になりました。

信州と大都市を比較した場合、新しいものや利便性という面では全然勝てないと思いますが、古いものは善光寺や松本城だけでなく、まちの景観、棚田の光景など勝てる要素がたくさんあると思います。ところが、地元ではそれに気づいていない人が多いように感じておりまして、私が松本が好きだというと、地元の方から、何がいいのとか、東京の方が便利でしょと返ってくるのがやはり多いのです。

京都や鎌倉でさえも、日本家屋や蔵などが、今どんどん取り壊されていて、それに対して日本人は喜んで、外国人が嘆くという状況があると思います。松本でも今は本当に古い建物というのが壊されて、駐車場、ビルやアパートに変わっていく光景というのをたくさん見ました。そういった建物は木造なので耐震面でいろいろと致し方ない面もあるかとは思いますが、古いものにすごく価値があるということ、県としてあらためて率先して啓蒙させていただきたいと感じました。それがやはり、山々の変わらぬ自然を守り続けることにもつながるとも思いますし、是非そういったところをお願いしたいと率直に感じました。ありがとうございました。

(清水会長)

ありがとうございました。後で県のご意見をまとめていただきたいと思います。
ほかにいかがでしょうか。どなたでも結構でございます。
高野委員どうぞ。

(高野委員)

今、鈴木委員さんの方から外へのアピールについてのお話がありましたが、私が最近感じているのが、住民の方の意識の問題です。例えば、今「信州暮らし」をアピールするという話になっていますが、農家の方や、山に住んで昔ながらの信州らしい暮らしをされている方が、このコンセプトを今本当に理解しているのか、あるいはこれから理解できるのかという部分も、大切な問題だと思います。

ですから、今年度から信州キャンペーン実行委員会の中に「おもてなし部会」をつくっていただき、その取組として例えば県民の皆さん方にテレビCM等によりおもてなし向上のアピールをしていくというお話がありましたが、このテレビCMもしかり、また市町村観光担当課や他の部署も使っていただいて、住民の皆さん方に「信州暮らし」を浸透させていただいて、自分たちの日常の生活は本当に自信を持っていいものなんだ、今長野県はこれをアピールしようとしているのだということを感じていただくことが必要だと思います。そういうことを、資金的な面も含めてバックアップしながらアピールしていかないと、そういう暮らしを続けるにはコストがかかたりするので、先ほどのお話のように建物を壊して生活を変えていくという動きも出てきてしまうと思います。

例えば、千曲市の稲荷山地区には昔ながらのまち並みや蔵が残されています。一見するとぼろぼろなのですが、最近になってこれを地域資源として磨き上げようと地域が立ち上がり、市の応援も受けながら、重要伝統的建造物群保存地区の選定をめざして取り組んでいます。県全体としても同じように、地域住民の方々には自覚し行動を起こしていただいて、行政にはそれをバックアップしていただいて、「信州暮らし」を維持し、アピールしていくことができればいいと思っています。

そのための意識づけという面では、最近県下46地点で地域に事前告知をすることなく観光旅行者満足度調査をされたということですが、これをあらかじめ告知して、具体的には、おもてなし向上の目的で調査を行うこと、日常の「信州暮らし」をアピールしながら来訪者に真心を込めて接する必要があることを地域の皆さんにお知らせした上で調査を行えば、地域住民の皆さんの意識醸成につながるのではないかと思います。以上です。

(清水会長)

ありがとうございます。
では、松本委員さん、どうぞ。

(松本委員)

事務局に質問があります。例えば今の「信州暮らし」にしても、実際にそれぞれの地域の人々がこれを実践できなければ意味がないわけです。これについて、県としては市町村に対してどのようなアプローチをしているのか、どういうディスカッションが行われているのか、ということをお聞きしたいと思います。

(清水会長)

今、鈴木委員さん、高野委員さん、松本委員さんからご発言がありまして、基本的に同じ中身のご意見だったかと思えます。「信州暮らし」あるいは「しあわせ信州」、こういったものに中身をきちんと詰めてどうやって伝えていくのか、あるいは、それを住民の皆さんとどういう形で共有していくのか、そのような意味で県としての取組はいかがかというご質問であったと思えます。

この件について、事務局の方からいかがでしょうか。

(尾島企画幹)

信州ブランド推進室の尾島と申します。

鈴木委員さんから、「しあわせ信州」がなかなか想起できないというお話をいただきました。先ほど委員からお話がありましたように、私どもの方でも、今「しあわせ信州を見つけようプロジェクト」ということで、一人ひとりのいろいろな「しあわせ」を募集させていただいておりまして、動画や写真、そういうもので表現していただき、それを私どもの方へお寄せいただくという取組をしております。

様々な「しあわせ」が出てくると思えますので、それを一般の方々にもご参加いただけるフォーラムの場で紹介したり、今後その中から県のプロモーションビデオをつくって紹介させていただくことを予定しております。

また、お寄せいただいた作品は、今の段階でもホームページで紹介しておりますので、そういうものを多くの人にご覧いただき、感じていただくことによって共感していただければと思います。そのような中で「信州のしあわせ」というものが皆さんにわかっていただけるのではないかと、今取り組んでいるところです。

(浅井観光企画課長)

鈴木委員さんから、古いものについての評価・発信が相対的に少ないのではないかと具体的なお話がございました。

我々のライフスタイルの中には、昔から培ってきた風土や文化、そういったものの積み重ねの上に成り立つ今の暮らしというものがありまして、「信州暮らし」というキーワードは、そういったものを踏まえた上で、皆さん、それを楽しんで発信しましょうということがございます。ですから、古いものについては、当然に、非常に大きな要素としてここに含まれていると思っております。

地域によっては、実際に古いものを活かしていこうということもございます。例えば今回山岳高原研究会において重点支援地域として3地域を推薦いただきました。その一つに木曾町がありますが、この地域の選定理由の一つは、もちろん山

岳高原もあるわけですが、地元の昔からの生活が、日本らしいもの、あるいは信州らしいものとして、世界にアピールできるのではないかという理由でありました。古いものについても、十分に活かしていきたいと考えているところでございます。

また、松本委員さんから、「信州暮らし」を地域にどのように伝えていくのか、どのようにやっているのかというご質問がございました。

地方事務所ごとに「地域観光戦略会議」という会議を設置しております。これは地方事務所が中心となって、地域の市町村や観光関連団体、事業者など観光に関係する皆様にご参加いただく会議でございます。

現時点では、この計画はできたばかりですので、こうした会議の場をお借りして、新しい観光計画のことで、「信州暮らし」を売りにしていきましようということ、今一生懸命PRさせていただいているところでございます。

それから、そういったものを周知した上で、それでは具体的に地域を発信しましょう、「信州暮らし」を発信しましょうという動きが出てきた場合、例えば、一般の方や他産業の方も含め、観光事業者だけではない いろいろな立場の方が参画して魅力づくりをする、将来的には商品化しましょうという具体的な動きが出てきた場合には、観光地域づくり促進事業の中で支援できるものはしていきたいと考えております。

(清水会長)

松本委員さん、追加、ございますか。

(松本委員)

私も安曇野の観光振興に多少関わったのですが、観光協会に属している観光事業の方たちに加えて、例えば農業に携わる方、文化に携わる方、いろいろな方々が一緒にならないと、今議論している「信州暮らし」というのは実現できないと考えています。

ですから、今観光企画課長がおっしゃいましたが、観光分野以外の皆さんとどうやって接点をつくっていくかということが一つの課題なのではないかと思えます。

今後の長野県観光を実際に魅力的なものにしていくためには、観光の中に農業に携わる皆さん、陶芸や作家など文化関係の皆さん、そうしたいろいろな方々が入り込める場をどうやってつくるのかということが課題のような気がいたしました。

(清水会長)

ありがとうございます。

御代田委員さん、お願いします。

(御代田委員)

私は今、各地でワークショップに参加していますが、実はどこでも松本委員がおっしゃったことと同じ課題が挙げられていまして、従来は観光事業者だけの世界だったものが、今はいかに他産業の方々と連携していくのかということが大事になっ

ていると思っています。

実はタイムリーなことに、昨日6次産業化について農林中金のお話をおうかがいしました。それは、6次産業化には制度的にも資金的にもいろいろな仕組みがあるわけですが、それが当初期待したようにうまく進んでいない部分があって、その一番のネックは流通の部分だというお話でした。

そのお話は、流通の部分がうまくいったとしても、市場に出たときに価格面やコスト面で負けてしまう部分があって、ではいかにしてこれからの6次産業化を進めるかということ、やはり農業の切り口だけではなく、観光や他産業と結び付いて、いかに地域にお客様を呼んでそこで消費してもらうかということが大事であるというものでした。

ちょうど長野でもワインのプロジェクトをされておりますが、観光事業者だけではなく、やはり農業や林業といった他の産業との連携がすごく大事ではないかと思っています。

あと、先ほどもお話がありましたが、観光地域づくりでは、地域の皆さんにどうやって地域の魅力を理解してもらい活動してもらうのかということが大事だと思っていて、その部分に是非取り組んでいただきたいと思っています。

それは多分、広報誌やCMではあまり伝わらないのではないかと思います。今回そういったプロジェクトが用意されているということなので、それも一つの方法だとは思いますが、加えて、各地域のワークショップに参加して思うのが、Iターンなどによる移住者の方が地域の魅力を客観的に理解しているということを実感しています。他所から来た方、県外に住んでいる方など第三者から評価してもらうことによって、地域の方が誇りを自覚できる機会になるとと思っています。

(清水会長)

ありがとうございます。

他にいかがでしょうか。加藤委員さん、どうぞ。

(加藤委員)

皆様のお話をおうかがいし、事務局からもご説明いただいて、「しあわせ信州」「信州暮らし」「おもてなし」、それから観光旅行者の満足度調査で「非常に満足」という7段階評価の最上位の区分をメルクマールとして目標設定する、こうした計画を拝見して、どれもそれぞれがすばらしく、本当に実現のお手伝いをさせていただきたいと思っているのですが、何かこれを繋げられないかと考えておりました。

「おもてなし」とは何だろう、「しあわせ」とは何だろうと皆さんのお話を聞きながら考えていました。「おもてなし」というのは他人、よそ者に優しくすることだと思います。ですが、自分がしあわせでない人は、他人に優しくできないと思います。イエス・キリストとか、ガンジーならばできるかもしれませんが、一般的な凡人には、やはり自分が満たされてしあわせに暮らしていないと、なかなか他人に優しくできないものだと思います。

観光客というのは究極の他人、よそ者です、もう一生会わないかもしれない「一

期一会」の人なので、そういう方々に優しくするには、やはりその人自身が満足だったり、日々の自分の暮らしに幸福を感じていなければならない、そう考えると、長野県は幸福度第1位ということなので、「おもてなし」に一番近い県民なのではないかと思いました。

それで、「信州暮らし」でしあわせな暮らしをしている方々が、そのしあわせを、究極のよそ者である観光客の方に、一期一会の瞬間におすそ分けする、こうした「しあわせのおすそ分け」が「おもてなし」なのではないか、完全なる主観で何のデータにも基づいていないのですが、このように思った次第です。

それでは、しあわせとは何だと考えていくと、皆さんはどんな時にしあわせを感じますか。私がしあわせを感じるのは、結構身近なことが多くて、例えば すごくおいしいご飯を食べたとか、ちょっと寝不足が続いているときに干して太陽の香りがするお布団で寝るときなのですが、長野県の皆さんは、多分「信州暮らし」の中で、そうした「しあわせの雫」を感じる、「奇跡の瞬間」を感じるタイミングが多いから、幸福度が高い県民なのではないかと想像します。その片鱗でもいいから、観光客の方に滞在中に感じていただけると、「非常に満足」というトップボックスの満足度を感じる旅行者が増えていくのではないかと思います。

信州の方々の「信州暮らし」の中の「幸福を感じる一瞬」「しあわせの1滴」を私も知りたいし、集めたい、そういうものが集まってきたら是非旅行に来て体験したい。ずっとこれを体験したいと思えば「移住」に繋がるのではないかと思いました。

だいぶ右脳的な話で恐縮ですが、発言させていただきました。

(清水会長)

ありがとうございました。

たくさんの方にご発言いただきたいのですが、限られた時間でございますので、この辺りで論議を終わりにしたいと思います。

要するに、昨年のすばらしい議論を踏まえ、我々は「信州暮らし」をきちんと自覚し、自慢し、誇りにし、そして、それをさらに磨く中で、来訪者と一緒に楽しみながら、さらに「信州暮らし」を高めていくということで、新しい観光計画もこうした議論を踏まえ出来上がったのだらうと思います。

そういった意味で、大きな理念、高尚な志の部分は共通の認識となったわけですが、問題は中身をどうやって充填していくのかということ、あるいは、充填する中でできるだけ多くの住民の方々にそれを認識しながら誇り感じていただくことだと思います。その一端を「おもてなし」という形で来訪者にどのように表現していくのかということ、あるいは全体での発信をどのようにしていくのかということ、そういった部分がまだまだ十分ではないということが今日の意見だったと思っております。

難しいこととは思いますが、県には是非こういったものをきちんと踏まえながら、平成25年度の今後の取組、平成26年度の事業の検討をお願いしたいと思います。

その中で、例えば牧野委員からは、具体的な意味でのタスクフォースをもう少し考えてもらいたいというお話しがありました。

私は今、県の山岳高原観光地の研究会、おもてなし向上懇話会で座長をしておりますが、これはある意味でタスクフォースになります。今、山岳高原研究会では山岳高原を活かした滞在型の観光地を具体化しようとして取り組んでいます。その根底には「信州暮らし」があります。そこでは一般論ではなく、木曾町さん、白馬村・大町市・小谷村さん、それから飯山市を中心とした信越9市町村の3地域を選ばせていただき、星野リゾートの星野佳路君、スイスの山田桂一郎君といった何人かの専門家で地域に入って現地の方々と徹底的に議論しようと考えております。

おもてなし向上懇話会では、ホテルのリッツ・カールトン日本支社長をやっていた高野登君、由布院玉の湯旅館の指導をしている福島規子さんといった専門家に入っていただきながら、おもてなし向上の議論を徹底的にやって、具体的には直接現地に入って議論を進めようとしておりますし、さらには、今、国の事業をたくさん引っ張ってきておりますが、その中では戸倉上山田温泉を一つのテーマで変えていく試みに高野委員と取り組んでいるわけです。

このようなことも含め、県、市町村、地域の役割を踏まえながら、こういったことができるか議論を進めていきたいと思っております。

さらに、地域の関係者、それは観光関係者だけではなく、いろいろな関係者が入って論議するということがやはり必要だということがあちこちで出ておりますし、飯山のように現実に始まっているところがありますが、この辺りが十分ではないとかねがね思っております。そういった意味で、実はこの観光振興審議会も観光関係者だけでいいのかという議論もあります。そのようなことも含め、いろいろな議論の場をどうやってつくっていくのか、この辺りも今年度、来年度の事業の中でお考えいただければありがたいと思っております。

そのようなことを含め、我々が作り上げてきた「信州暮らし」を本当に名実ともに自慢できるものにしていく、そんなことをみんなでしっかり考え、それらを具体的に展開していく必要があると思うわけでございます。その辺りの一助になれば、この審議会の存在感が出てくると思っております。また次回、いろいろなご提言をいただければありがたいと思っておりますので、よろしく願い申し上げます。

今日は限られた時間で、ご発言いただける方が限られてしまい申しわけございませんが、以上で終わりにしたいと思います。

それでは、事務局にお返しいたします。

(浅井観光企画課長)

どうもありがとうございました。

それでは1点だけ、次回の日程についてご連絡させていただきます。

次回、第2回は、来年の2月頃を予定しております。少し前広に日程調整させていただきますので、よろしく願いしたいと思います。

それでは、本日は長時間にわたりご審議いただき、ありがとうございました。以上で終了とさせていただきます。ありがとうございました。

以上